

第二次世界大戦の敗北を1945年の夏に台湾で迎えた私は、翌1946年の春、長野県の松本市郊外にある父の旧家に引き揚げ、1947年春に旧制松本高等学校の理科に入学した。そのとき振り分けで入れられたクラスは、今風に言えば、英語が第二外国語で、第一外国語はドイツ語というクラスであった。

当時の日本は極度の物資不足に悩まされていた。書籍にしても紙不足で本の出版はほとんど無く、書物を手に入れるには主として古本屋のお世話になっていた。[...省略...]

そんな時代であったから、授業が始まって暫くすると、ドイツ語の教科書のほうは何とか入荷したものの、独和辞典が全く手に入らない。幸いある知人が、実は売りたいと思っている余分が一冊あるのだがと言ってくれたが、私にはすぐに手の出るような値段ではなかった。それでもかれは親切に、では買い手が付くまではと言って、気前よく貸してくれたので、大いに助かった。

それからもう60年ほど経ってしまったので、残念ながら今ではその辞書の具体的な名前や著者名を思い出せないのだが、その見かけは少し古びていたにしろ、表紙が鮮やかなオレンジ色で、いま言うコンサイズ版よりは少しばかり大きい、全体にしっかりした作りの辞書であった。

どんな品物でも極度に不足していた当時は、書籍類として例外ではなく、ドイツ語の辞書の類も、中古書の市場では引揚者の身にはおいそれと手が出ないほど高い値段が付いていたので、まだ私にはそれを譲り受けるだけのゆとりがなく、そのまま使い続けさせてもらっていた。

そんな状態が何か月か続いたのち、密かに恐れていた日がやって来て、実はあの辞書に買い手が付いたから、返して欲しいのだがと言われてしまった。

そのあと暫くは、教室で全身を耳にして先生の講義をノートに取り、復習だけはしていたが、語学というものを辞書無しで予習することは、極端にむずかしかった。

そんなある日、建てられてから270年にもなるという父の家の、古い物で一杯になっていた屋根裏部屋を、何十年振りかで片付けていたら、当時単身赴任で大阪府に出稼ぎに行っていた父が、学生時代に

使っていたらしい独和辞典が出て来た。

それは1912（大正元）年に三省堂が刊行した、保志（ほし）虎吉・編『大正独和辞典』で、古くてしかもかなりくたびれており、使われている印刷文字も、当然旧くて読みにくい亀の甲文字（Fraktur）であった。それでも私としては、今でも忘れられないほどに嬉しかったことを思い出す。

かなりあとになって知ったことであるが、この辞書は三省堂が、1896（明治29）年発行のユリス・高木甚平・保志虎吉・編の『袖珍独和新辞林』に次いで第二番目に出した独和辞典であったとのことである。したがって、その用字・用語の旧さといったら相当なもので、たとえば“der Schinken（ハム）”の訳は「火腿、臘乾（ラカン）」となっていた。

また、その不可解さの故に今に至るまで良く覚えていることになったのだが、たまたま引いた“loosen（籤を引く、今ではlosen と書かれる）”の訳が、「鬪を拈く」といったぐあいの大時代物であった。漢和辞典によると、この「拈」は「ひねる（捻る、撚る）」の意味を表わす漢字だから、どうもこの訳は何かの間違いなのではないのだろうか、ずっと思っていた。

すなわち、1939（昭和14）年に弘道館から初版が出て、第二次大戦中の中学生時代から当時に至るまで私が使い、その後の1957（昭和32）年には改訂増補版が高等教育研究会から刊行され、さらに1980（昭和55）年になって三訂増補431版の翻刻が図書刊行会から出され、今でもそれが私の手許にあるというように、かつては非常に広く使われた漢和辞典であった塩谷温（しおのやおん 1878 - 1962）・著、『新字鑑』を見ても、[... ..]「拈」には「捻る、つまむ」といった意味しか出ていない。

しかし今回この文章を書くに当たり、もしやと思いつき、この時代よりずっとあとになって勉強した中国語について調べてみたところ、驚いたことに、これはまさしく中国語そのものであった。

たとえば中国における北京外国語学院・英語系で編集した『漢英詞典』（北京：商務印書館 1980年）には言うまでもなく、倉石武四郎・著『中国語辞典』（岩波書店 1963年）や、香坂順一・編著、『簡

約現代中国語辞典』（光生館 1986年）といった中日辞典にも、さらには倉石武四郎・折敷瀬興（あきら）・著『日中辞典』（岩波書店 1983年）といった日中辞典にも、「拈鬮（niān jū）」は、ちゃんと「くじをひく」と出ている。すなわち「鬮を拈く」は日本語ではなく、なんと中国語そのものの書きくだしでしかなかったことが判った。

そんなわけで、保志虎吉を含め、当時の語学者に漢学の深い造詣があったことは良く判ったのであるが、しかし日本語の辞書としては、この『大正独和辞典』は、まだ十分にこなれきれてないしろものであったことは否めないであろう。

[.....]

それはともかくとして、そうした中国語もどきの辞書を使ってドイツ語を勉強したのであったから、私としてはしばしば漢和辞典と国語辞典とをいっしょに使うことを余儀なくされていた。同時に、そのお蔭でたいそう漢字・漢語の勉強になったこともまた事実であった。

それに、幕末に長崎のオランダ商館長になったドゥーフ（Hendrick Doeff 1777 - 1835）と、かれを取り巻く日本人通詞たちとによって編纂され、1833（天保4）年に長崎において刊行された日蘭辞書『ズーフ・ハルマ』58巻全巻を、その持ち主から借り受け、1年近くをかけて2部も筆写した、幕末の志士、勝安芳（海舟 1823 - 1899）の逸話のことを思えば、辞書の現物が持たただけでも、まずは有り難いことに思えた。

とは言っても、海舟ほどの気骨を持たなかった私には、毎日の辞書引きがそんな調子なのはやっぱりたまらなくなかったので、家から学校まで片道が1時間半ほどの道のりを歩いて通学していたにも関わらず、放課後には毎日のように市内の古本屋を巡って、独和辞典の出物を探して歩いた。[.....]やはりお百度参りは欠かせないようなご時世であった。

そんな風にして、やっと手に入れることが出来たのが、1932（昭和7）年に南江堂が刊行した、片山正雄・著『双解独和小辞典』である。今になっては、記憶がちよっとあやふやであるが、入学してからそのときまでに、なんでも1年くらいは経っていたように思う。この辞書には、まだ亀の甲文字が使われていた。

この辞書は、当時は独和辞典の王者とされていた、同じ片山正雄による『双解独和大辞典』（南江

堂、1927年）を圧縮して携帯に便利としたもので、その小型化にも関わらず、大辞典の特色であった、語の説明をドイツ語と日本語とで付けてあるという、「双解」性をそのまま引き継いでいたので、持ち運びの簡便性と相まって、大辞典よりもいっそうの名著として、広く使われていたものであった。それで私も、旧制の高校から大学を通して、この「片山の小辞典」は6年のあいだずっと使い続けた。

[.....]

高校生になってからは、当時アメリカで話題となっていた超能力にも関心を持ち、いわゆるテレパシーなるものは、人間の思考過程に伴って脳内に流れる電流が作り出す微弱電磁波と関係があるのではないかなどと、漫然と考えたり、さらにその実験的検証法の可能性に思いを馳せたりしていた。

そんなわけで、大学に進んでからの私の専攻は、電気通信から始まった。しかし、そのころのアメリカではコンピュータが大きな話題となっており、それに関係して、今に言う人工知能的な夢もしばしば大げさに語られ、それとともに、コンピュータと脳の構造や機能との類推がとり沙汰されていた。そんなことがあったので、私の関心も通信技術から、ついにコンピュータや脳科学へと広がっていった。

そうした分野に関連して使う辞書の一つとしては、すでに高校生活が終わるころには、賀川哲夫・編、『標準医語辞典一独・羅・英・仏・和』（南江堂 1936年）を古本屋で手に入れてあったので、早速これが役に立つことになった。

当時の日本の医学界では、まだドイツ医学が優勢であったから、この辞書の見出し語には圧倒的にドイツ語が多く、書名のほうにも“Medizinische Terminologie”というドイツ語の副題が付いていた。

この辞書に関連して、当時の辞書の物理的な質の事情について少し述べておくと、私の買ったこの「医語辞典」は第二次大戦まえに出された立派な作りのものであった。ところが私たちが大学に入った1950年あたりになって販売された同じ辞書は、まだ紙の質が悪くて、少しの湿度ですぐにページが丸まってくるうえに、装丁の悪さとも相まって、ページがめくりづらく、また裏面の印刷が紙の表に透けて見えるので、かなり読みづらいものでもあった。

高校時代に同級生であった親友が、大学では医学部に進んだが、あるとき会ったところ、良質の医学辞典が手に入れられないので、やむなく戦後に出されたものを使っているが、引き辛く、予習復習に時間がかかって困るとこぼしていた。

当時の医学部では、まだドイツ医学が中心であったから、かれは毎日ドイツ語と取り組んでいたのだが、私のほうではこの医語辞典などは時たまに使うくらいのものであったので、かれの苦勞話を聞かされたあと、二人のあいだでは、お互いの辞書を交換して、無期限に使おうということになった。その後になって会ったとき、かれは学習がとても楽になったと言って、たいそう喜んでいて。

そのかれも、かつては海軍兵学校で鍛えられた頑健な男であり、またのちには医師として、ある大病院の内科長になっていたにも関わらず、惜しいことに、働き盛りにあっけなく病死してしまった。

そんなわけで、そのときに交換したかれの辞書は、今も私の手元にあるが、私の辞書のほうがその後どうなったかについては審らかにしていない。

とにかく、1954年になって私がアメリの大学に留学するに当たっては、先の「片山の小辞典」は、時代的にもうだいぶ古いものになっていたもので、三省堂編集所・編『独和新辞典』（三省堂、1954年、ローマ字活字で印刷）を新しく買って、この「医語辞典」と一緒に持っていった。

当時、伝統的なアメリカの大学のほとんどでは、Ph. D. (博士号) の資格を取得するのに、英語を除き、専門分野ごとに、学術的な文献の十分な蓄積があると認定された外国語のうち、二つ以上の熟達度認定試験に合格していなければならないことになっていた。

私の専門分野では、日本語はまだそのころは学術的言語として認定されていなかったもので、ドイツ語のほかに、私はロシア語、それに中国語を勉強することにした。[.....]

そうしたわけで私は、留学後もドイツ語の勉強は続けていたが、そのときに使ったドイツ語の辞書は、英語による受験に、より向いている、当時ニューヨーク市にあった Funk and Wagnalls 社が出版していた“Cassell's German and English Dictionary”に切り替えてしまっていた。これは1939年が初版のものであったから、印刷はまだ亀の甲文字のままであった。

この辞書はかなり大きな冊子体なので、ふだん持って歩くのには不便だから、日ごろは E. Klatt と G. Golzeによって編まれた、“German-English Dictionary” および“English-German Dictionary” が一つに纏められてポケットブック版になったもの (Langenscheidt's, 1952年) を用いていた。

また私の専門はコンピュータ、のちには情報科学であったのに、科学の専門用語のために便利な辞書として、Austin M. Patterson, “A German-English Dictionary for Chemist” (third edition), John Wiley Sons, 1951 というのが、どういうわけか推奨されていたので、これも手元にも揃えた。

大学を出てからは、アメリカの企業で働いたり、大学で教えたりしていたが、もうドイツ語とはあまり縁が無くなってしまった。それでも1972年に日本に帰って来てからは、今までに倉石五郎・編、『最新コンサイス独和辞典』（三省堂、1961年）、富山芳正・編集主幹、『独和辞典』（郁文堂、1987年）と、必要に応じてもう二つほど新しい独和辞典を手に入れた。

かつてアメリカではIBM 社の中央研究所において、言語の機械翻訳の研究に従事して以来、私は言語学に関心を持っていた。そうした目で見ると、一般に外国語の教育者にはふつう言語学的視野が狭いように見えるのに、倉石はドイツ語の枠を超えて、言語学的観点からよく発言していると思われた。そんなわけで、これら二つの辞書のうち、倉石によるものは少し古かったが、なんとなく関心を持ったのであった。

その後私は、国際標準化機構 (ISO) の一隅において国際的な委員を務めるようになり、国際会議においてドイツの代表団と接触する機会が増えたので、もっと新しい辞書が欲しくなって、富山の辞書を手に入れたのである。[.....]

そのほかには、和独辞典のほうも幾つかを手に入れてあって、これらドイツ語の辞書のほとんどは、その時どきの思い出と共に今も私の手許にあって、それぞれ状況に応じて役に立っているが、それらについては、ここでは省略することにしよう。

なお、この文を書き出してから、先に述べた、私が高校生時代に借りて使わせてもらったオレンジ色の表紙の辞書が、いったいどの辞書だったのかということが気になりだし、最近になってその時代を経験した旧友たちに問い合わせしてみたりしたが、60年ほど前の古いことなので、さすがのかれらも、もう思い出せないとの返事だけが返ってきた。

しかし、それが私としては最初に使ったドイツ語の辞書だったせいか、なんとなく諦めきれない気持ちがあって、さらに食い下がって、いろいろ話を聞いているうちに、かれらの応えてくれたことがヒント

になり、インターネット上でいろいろと検索を試みたところ、矢儀万喜多・根本道也『新修ドイツ語辞典』（同学社、1972年）の著者の一人である、長崎外語大学の根本道也教授がドイツ語辞典の歴史の研究と取り組んでいらっしゃる事が判った。

[.....]

そうこうしているうちに、たまたま手元にあった、1935（昭和10）年刊のある本を見ていたら、南江堂で出版した、片山正雄・監修、『袖珍・独和辞典』という辞書の広告が見つかった。その刊行されたのが、あのオレンジ色の辞書と時期的に合っているようであったし、またそのページ数も650ページという手ごろな大きさのものであったので、ひょっとしてこれだったのかもしれないという気がした。

それで早速旧友たちに問い合わせしてみたところ、今度は思い出してくれる者があり、これに違いないのではないかということだったので、やっとならぬとドイツ語辞書について私が辿った遍歴の全てが、いちおう終わることになったかに思われた。

ところがその後になって根本教授が、独和辞典の編纂の歴史についての資料を添えて、お手紙を下さ

った。それによると、日本における独和辞典の編纂の歴史は私の思っていたよりも長く多彩で、既に明治時代には、先に述べた三省堂の『袖珍独和新辞林』のほかに、すでに大小 12 種類ほどが刊行されていたことが判った。

昭和に入ってから、大辞典としては先に述べた片山の『双解独和大辞典』のほかに、登張信一郎

『大独日辞典』（大倉書店、1933年）、木村謹治・相良守峯『独和辞典』（博文館、1940年）が出ている。そのほかにも、先の片山の「袖珍」や山岸の「コンサイス」以外に、小型辞典と思われるものとしては権田（法政大学大原社会問題研究所付設の天王寺ドイツ語ゼミナール主任であった権田保之助か？）による『最新独和辞典』（有朋堂、1927年）や、佐藤通次『独和言林』（白水社、1936年）、権田『ゴンドラ独和新辞典』（有朋堂、1937年）などがあって、かつて私が借りたオレンジの辞書が、果たしてどれであったのか、またもや判らなくなってしまった。

今ごろになって、なんでわざわざそんなに古いドイツ語の辞書のことにとこだわるのかと言われてそうであるが、正直のところ、特にこれといった理由はない。しいて言えば、戦後当時の苦しくて大変だと思っていたころの記憶について、われわれ世代が持っている郷愁と感傷のなせるわざなのであろうか。

思い返せば、今の学生たちは、かつて書物というものが手に入らなくて苦労させられたわれわれのように、勉学のために使う辞書を求めて走り回るといような苦労をする必要は、もう今は全く無いのだから、少なくともその意味においては、かれらはわれわれよりはずっと幸せであろう。[.....]

(

(2004年12月1日)

追記 (1)

本稿を書き上げたあと、この中で触れてある、大学生時代に、お互いの『標準医語辞典－独・羅・英・仏・和』を交換して使った、すでに他界してしまったかつての友人の奥様に、そのコピーをお送りしたところ、書庫の中から私のほうの辞書を探し出してきて、送ってくださった。まさに半世紀ぶりの再会が果たされたのである。

その辞書が良く使い込まれていたことは、見た目には明きらかではあるが、それでも私が思っていたよりはずっときれいに残っていた。さすがに革の背表紙は擦り切れてしまっているが、補修が丁寧に施してある。

しかも、ページが引きやすいようにと、かつて私が小口に細かく書き込んだアルファベット文字が、意外にくっきりと残っていて、それを書き入れたときの状況が、まざまざと思い出されたのには驚いた。

しかもあのときの、二人で辞書を交換して使おうという条件を、かれは本当に信じていたようで、私が押しあつた判子はそのままになっているばかりか、かれの名前を示唆するものは何一つ付け加えてない。

それなら私の使っていたほうはどうなっているだ

ろうかと、久しぶりでかれの辞書を引っ張り出してみたら、私はかれのものにさっさと自分の判子を押し、署名までしてあった。かれの実直さがいまさらのように思い出され、もう不可能になってしまったのに、またかれと逢って話しをしてみたいという、強い衝動に駆られてしまった。

そんなことで、思いにふけているうちに、突然思い出したことがある。それは1950年代のアメリカ

留学の直前に、先ほど触れた片山正雄による『双解独和大辞典』が、カバーまで付いた全く新本同様の状態で、ある古本屋に並んでいた。それがあまりにきれいだったので、特に必要も無かったのに、つい衝動買いをしてしまった。しかし、何かほかの本を買うために、ほとんどすぐに手放したのだった。

(2005年5月)

追記 (2)

上のエッセイを書くに当たりドイツ語の辞書についていろいろと情報を頂いた、長崎外語大学の根本道也教授が編纂者の一人をなさっている『新修ドイツ語辞典』では、発音の表記にかなが使われているのを知り、いささか複雑な思いをさせられた。

というのは、かつて日本語のローマ字表記について、いわゆる訓令式つづりが1989年に国際標準ISO 3602として制定されたときに、私はその担当専門委員のお手伝いをした。その際に、ある言語の表記法を考えるに当たっては、他の言語のことなどを気にすることなく、その言語自体の組織だけを基盤にした記述法を考えるべきであるという、構造言語学における表記法の根本原理を頭に叩き込まれていたからである。

かなというものは、子音母音の異なり数が相対的に少なく、しかも開音節（モーラ）が基本となっている日本語を表記するには向いていても、子音母音の異なり数が多く、それらの音価も日本語とはかなり異なり、しかも閉音節が多く含まれるドイツ語や英語を表記するには全く向いていない。

言語学におけるそうした原理にもとり、英語におもねった、いわゆるヘボン式つづりを日本語のローマ字表記に用いていることが、実は日本人の多くにおいて英語の発音が貧しくなっていることに大きく関与していることは、言語学者（linguists）によってつとに指摘されている。

したがって、辞書における発音を表記するためには、多くの異なる言語のどれもが満足に記述が出来るようにと、長年にわたり世界の言語学者によってくふうされてきた、国際音標文字（International Phonetic Alphabet, IPA）を用いるのが、今のところ最善であると言える。

それにIPAといっても、何もそんなにむずかしい文字ではない。ある特定の言語一つに対して使われる文字の数はせいぜい50に限られている。小学校以来、何千もの漢字の、しかも万を超えて異なる読み方を、苦勞して身につけることを余儀なくされている日本人にとっては、IPAの活用を身につけることなど、何でもないはずなのだか、なかなかそれが出来ないというのは、いったいなぜなのだろうか。

とは言っても、ドイツ語の習得を含むような程度の高い教育が、国民の大多数に期待されるようになった今の社会では、例えば分数の扱えない大学生が出現するなど、一般には大学生の質の大幅な低下も起こっているようであるから、かな書きによって標音表記されたドイツ語辞書なども、社会では必要になってきているのだろうか。

それはそれとして、私が1947年に旧制松本高校に入学したということは冒頭に書いたが、入学早々にドイツ語を教わった先生の一人が、若く澁瀬としていて、よく響く声の持ち主の小栗浩先生であった。

このところ私は、ずっと病状が思わしくなかったもので、2005年の10月17日になって、何年ぶりかで松高のクラス会に出ることができた。そのとき、われわれがたいそうお世話になった小栗先生について、楽しかったみんなの思い出話しが弾み、お互いに喜びを分かち合った。もっとも私は記憶が悪いのか、そうした話には覚えていないことのほうが多く、もっぱら聞き役に徹していたが、それでもかつての高校時代のあれこれを改めて懐かしく思いだすことができた。

[.....]

そうしたことがあったので、帰宅してから、入院中に暇をもてあまして当ても無く書いてあった先のエッセイには、先生のお名前こそ出てはこないものの、あの当時にわれわれが直面していた厳しい状況の片鱗

が見え隠れしていることに思っていた。それに良く考えてみると、私がドイツ語をなんとなく好きになり、ついには言語学一般に対しても関心を持つようになった裏では、先生のお人柄の影響がかなり働いたのではないかとも思えて来た。

そんなわけで、先のエッセイのコピーを先生にお送りしてみる気になり、Eメールでクラス幹事に問い合わせ、先生の現在のご住所を調べてもらって、衝動的にお手紙を差し上げたのであった。

すると先生は早速にご返事をくださった。そしてそのなかには、旧制高校のドイツ語の時間はほんとうに面白かったこと、そして当時の私たちが、辞書が手に入らなくて苦労していたことを先生も良くご存知であったことなどが、懐かしさの思いの溢れる筆致で書かれてあった。

さらに思いがけないことには、私が高校生時代に借りて使っていた、例のオレンジ色をした表紙の辞書は、当時先生も使っておられ、先生が初めて留学されたおり、ブレーメン（Bremen）において紛失された、片山正雄監修の『袖珍・独和辞典』と同じものではなかったかと書かれてあった。

よく知られているように、ブレーメン市は、13世紀から近世初期にかけて、リューベック市（Lübeck）を盟主として、商業活動の便宜のために諸都市が結成したハンザ同盟の中心をなしていた、ドイツ北西部の主要都市の一つである。

もう10年近く前のことになるが、私はある国際委員会の仕事で北ドイツに赴いたときに、一日リューベック市に滞在して親しく市内の見物をしたことがあった。それでそのときのことがいろいろと思い出され、時間こそ離れてはいたものの、おそらく先生と私とは同じところを歩いていたのではないかと、暫し感慨に耽ってしまった。

それはともかくとして、先生の手紙のお蔭で、あのオレンジ色の辞書は、私が推測したように、片山正雄の『袖珍・独和辞典』であった可能性がいつべんに高まった。

さらに先生は、この辞書はその後改訂され、使われていた亀甲文字がローマ字になったことと、さらに手許には、もう要らなくなったものがあるから、よかつたら進呈しますよ、などと書いてくださった。

このように古くなった版の辞書というものは、版元の出版社まで行けば、あるいは保存されてあるかもしれない。しかしふつう古書店では、そうしたものは扱わず、また図書館でも処分してしまうので、巷にはあまり残っていないようである。

そんな訳で私は、先生のご親切なお申し出に対して、同級生と交換して使っていた、例の医学辞典のうち、かれの使っていた私の分は、もう一度見てみたくなったので、一旦かれの未亡人からお借りした後に、改めてお返ししたことを書き、その上で、先生の言われて

いる『袖珍・独和辞典』の改訂版はまだ見たことがなく、私もここまで食い下がってドイツ語の辞書を調べてみたからには、それも一目見てみたいと思うので、一時お貸しいただけたらと、あつかましくお願いしてみた。

それに応えて先生は、むかし自分で使っておられた、片山正雄・著、片山泰雄（ご子息）・改訂、『新独和小辞典』（南江堂、1956年）の改訂増補版（1969年）を、差し上げますからどうぞお使いくださいとの、再度のお手紙とともに、早速送ってくださった。

この辞書は、表紙の色こそ黒色に変えられ、また表記活字もローマ字化されていたが、その大きさも、手触りも、それにページ内容を見たときの印象も、かつて高校時代に私が借りて使っていたオレンジ色の辞書と全く同じ作りに感じられ、しかもこの辞書の「はしがき」から、その前者であった『袖珍』辞書が1931年に出版されたことが判り、年代的にもぴったり合い、それが『袖珍・独和辞典』であったことはまず間違いないと確信できるに至った。

先生がこの『新独和小辞典』をよく使い込んでいらっしやったことは、その手ずれの状態から判るが、それにも関わらず、[.....] 先生がこれをたいそう丁寧に使っていたことが推察でき、それだけでも私は何かほのぼのとした温かみを覚えて嬉しくなった。

そんなこともあり [.....] これはちょうど手ごろな大きさなので、先生のせつかくのお申し出に甘えて、ありがたく頂戴し、手許で気楽に活用させていただく気になった次第である。

最後にこの拙文を、かの疾風怒涛期の著名作家シラー（Johan Christoph Friedrich von Schiller 1759-1805）の1797年の詩、「広さと深さ」を、昔私が定型に訳したもので締めくくらせていただくことにする。

この詩の趣旨は、第二次世界大戦末期の1945年の暗い時局に、吉田テフ子・作詩、サトウハチロー・補作によって敷衍され、佐々木すぐる・作曲で世に出た、底抜けに明かるい小国民（当時少国民と書く）

歌謡曲「お山の杉の子」の前3分の2に引き継がれていると、私には思える。われわれの年代の者にとって

は、懐かしい曲である。 [.....]

広さと深さ

この世には、きわ立つ人の あまたあり、
なんであれ、ひとこと説くを 心得て、
人気あり、人目そばだつ ことならば、
よどみなく、もの見事に 応え得る。
滔滔の、かれらの言を 聞き居ると、
現実に 天下の大事 成る思い。

時来たり、実の無きいのち 終わりなば、
この世から、かれらは消ゆる 跡もなく。
汝もし、価値あることを 遂げなんか、
ひとかどの 偉業はたすを 願わんか、
あせるなく、おのが力の 限りをば、
たゆむなく、ただ一点に 集むべし。

Breite und Tiefe

[第3節省略]

Es glänzen viele in der Welt,
sie wissen von allem zu sagen,
und wo was reizet, und wo was gefällt,
man kann es bei ihnen erfragen;
man dünkte, hört man sie reden laut,
sie hätten wirklich erobert die Braut.

Doch gehen sie aus der Welt ganz still,
ihr Leben war verloren.
Wer etwas Treffliches leisten will,
hätt' gern was Großes geboren,
der sammle still und unerschlaft,
im kleinsten Punkte die höchste Kraft.
J. C. Friedrich von Schiller (1797)

お山の杉の子

吉田テフ子・作詩、サトウハチロー・補作佐々木すぐる・作曲
歌詞検索サイトでご覧下さい。

URLはこちら

<http://www.kget.jp/lyric/160437/%E3%81%8A%E5%B1%B1%E3%81%AE%E6%9D>